# ラビューラビュー―Love You Love You―

咲耶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ラビューラビュー―Ｌｏｖｅ　Ｙｏｕ　Ｌｏｖｅ　Ｙｏｕ―

【Ｎコード】
Ｎ２６６０Ｍ

【作者名】
咲耶

【あらすじ】
４つ年上の瑠璃を好きになった昭仁。
だが、婚約を解消されたばかりで傷付きたくないと思った瑠璃は、昭仁の言葉を信じられない。
周りのサポートで昭仁と付き合うことになったが、様々な障害が、二人を苦しめる。

# 雨宿り

雨宿り

外は雨だった。

この梅雨の時期の雨は決して珍しくないが、ここまで激しい雨は珍しい。

カサを差さずに外へ出れば、あっと言う間に不快なくらい濡れてしまう。

バケツをひっくり返した様な雨―と形容するのに、これ以上相応しい雨はない。

暇潰しの為の散歩の途中で雨に降られて、この喫茶店には、一時的な雨宿りのつもりで入った筈だった。それなのに、雨は一向に止む気配はない。

面倒臭そうに、壁の掛け時計を見る。

時計の針は、６時を指していた。

一人の男性が、慌てた様子で入って来た。

興味を持って男性を目で追うと、一人でコーヒーを飲んでいた女性の元へと駆け寄る。

女性は怒っている様子で、男性はそんな女性に対して頭を下げて、ただひたすら謝っている。

きっと、二人は待ち合わせをしていて、男性は遅れて来たのだろう。

店内を見回すと、週末の夕方に相応しく、殆(ほとん)どのテーブルはカップルで埋まっている。

それでも、そのうちの何人かは、彼と同じように、雨宿りの為にこの喫茶店へ入ったのだろう。

苛立った表情で自分の腕時計を見てから席を立つと、支払いを済ませて店を出て行く、サラリーマン風の中年の男性。

携帯電話で誰かに電話をして、迎えに来てと頼んでいる、ＯＬ風の若い女性。

そんな人々を観察してから深い溜め息を吐(つ)いて、恨めしげに外を眺める。

恨めしげに―と言うのも当然で、雨宿りの為にこの喫茶店に入ってから、既(すで)に２時間が経とうとしていた。

暇を持て余し、急いで帰らなければならない用事もなかったし、これだけ酷い土砂降りはそう続かず、直ぐに止むだろうと思ったから、雨宿りをすることにした。

だから、まさか２時間近くも足止めを食らうとは思ってもいなかった。

雨は、止むどころかより激しくなり、今では、バケツをひっくり返したような土砂降りになった。

出来ることなら、誰かに迎えに来てくれと電話したい。

何があっても、絶対に断らない友人が一人居る。

だが、短時間の散歩のつもりで家を出て来たので、携帯電話は置いてきた。

公衆電話から電話するにしても、生憎（あいにく）と、相手の電話番号は記憶していない。

間抜けな自分に苛立ちを覚え、この状況を抜けられないと諦めた。

激しい雨に白く霞む窓の外をボンヤリと眺める。

道行く人々は深くカサを差して、足元を気にしながらも、足早に昭仁の前を通り過ぎる。

何も考えずにボンヤリと人々を眺めていた昭仁の目が、一人の女性を捉（とら）えた。

女性は、この激しい雨の中、カサも差さずにそこに立っていた。

スーツ姿のその女性は、長い黒髪を後ろで一つに束ねて、黒縁眼鏡を掛けている。

キャリアウーマン風の、少しきつい、冷たい印象を受ける美人だ。

正直に言うと、昭仁のタイプとは真逆の、どちらかと言えば苦手なタイプの女性だった。

確かに、タイプではない昭仁の目を引くくらいの美女だったが、昭仁が気になったのは、彼女の美しさだけではない。

女性の前には、黒いカサを持った、スーツ姿の男性が立っている。向かい合って立っているところを見ると、女性の連れなのだろう。

右腕にはカバンを持ち、左手には黒いカサを持っている。が、この激しい雨の中、女性をカサの下に入れず、一人カサの下に居て、女性はびしょ濡れだ。

男なら、自分は濡れても、女性は濡らさないように、優先的に女性をカサの下に入れるだろう。

口の動きなど読めないが、女性の口が「サヨナラ」何て酷い男だ―と思うと同時に、もしかしたら別れ話をしているのかもしれない―と、直感が言った。

別れ話をしているから、男はカサを差し出さず、女も暗い顔で俯いているのかもしれない。

以前、自分も同じシチュエーションで、付き合っていた恋人と別れたことがある。

もし、自分の直感が当たっているなら、こうして観察を続けているのは失礼だ―とは思ったが、事の成り行きが気になって、目が離せなかった。

真剣な顔の男性の口が動いている。

何か話しているのだろうが、口の動きを読む能力など持ち合わせていない昭仁には、何を言っているのか判らない。

女性は、悲しげな笑みを浮かべた。

女性の口が「サヨナラ」と動いたのは、昭仁にも判った。

笑顔で別れを告げる女性を見て、強い女性だと思った。

冷たい美貌と強い心―正(まさ)に昭仁の苦手なタイプだ。

男も安堵した様な笑みを向けると、背を向けて歩き去った。

呆気ない、さっぱりとした別れだ―と思ったが、何故か女性から目が離せなかった。

目の前で起きた破局の場面に、酷い違和感を覚えた。

どんなに強い女性でも、笑顔で別れを受け入れられる筈がない。

女性は暫く歩き去る男の後ろ姿を見つめていたが、その背中が人混みに紛れて見えなくなると、ユックリと俯いた。

女性の細い肩が、微かに上下している。

泣いているのだと直ぐに判った。

彼女は強い女性などではない。ただ強がって見せただけなのだ。

ユックリ背を向けて歩き出した女性は、何かに躓(つまず)いたのか、見事に転び、その場に座り込んだ。

昭仁の所にコーヒーのオカワリを持って来た若い男性店員も、彼女が転ぶところを見ていたのだろう。「あっ！」と、小さな声を上げた。

驚いて店員を見ると、店員も、気まずそうな顔で昭仁を見ていた。

昭仁と目が合った店員は、気まずそうに作り笑いを向けた。が、何の反応も見せない昭仁を見て、咳払いを一つすると、逃げるようにその場から歩き去った。

店員の後ろ姿から、窓の外の女性に視線を移す。

女性は、まだ道路に座り込んだままだった。

女性に、救いの手を差し延べる者は居ない。

道行く人々は、女性に目もくれず、邪魔臭そうに顔を顰(しか)めて避けて歩く。まるで、ゴミか石ころの様な扱いだ。

それでも、女性はその場から動かなかった。

あまりにも長い時間動かない女性を見ていて、不意に心配になった。

動かないのではなく、怪我をして動けないのではないのかもしれない。

泣いている彼女を見ていなければ、強い女性だから―と、心配はし

なかっただろう。

女性が心配になり、このまま傍観者でいられなくなった昭仁は、女性の所へ行く為に店を出ることにした。

支払いを済ませる為にレジへ行くと、さっき、昭仁の所へコーヒーのオカワリを持って来て、女性が転ぶ姿を見て小さな声を上げた店員が居た。

昭仁の顔を見た店員は、何か言いたげに口を開いたが、言葉は出て来なかった。

支払いを済ませて、お釣りを貰おうと右手を差し出す。が、なかなかお釣りが貰えず、不思議に思って店員を見る。

店員は、お釣りを握ったまま、何か言いたげに昭仁を見ると、無言のまま窓の外へと視線を移す。

窓の外には、あの女性が同じ姿勢で、同じ所に座っている。

店員は、タイミング良く店を出る昭仁に、彼女を助けてもらえたら―と思ったのだ。

今直ぐ店を飛び出して女性を助けに行きたいが、そんな事をすれば、きっとこの喫茶店をクビになるだろう。

店員の気持ちを感じ取った昭仁は、微かな笑みを向ける。

この街の人間は、他人に関心の無い人間ばかりだと思っていたが、冷たい人間ばかりではないのだと、少し見直した。

昭仁の微笑を見た店員は、自分の思いが昭仁に伝わったと感じ取り、明るい笑みを浮かべた。

“任せろ”と言う気持ちでいたが、自分が店を出る間に女性がその場から居なくなっていても、それはそれで仕方ないと思った。

あの女性とは、縁が無かったのだ。

だが女性は、昭仁が店を出ても、女性の背後に立っても、ずっと同じ姿勢で、同じ場所に居た。

「大丈夫ですか？」

声を掛けても、女性の耳に昭仁の声は届いていないのか、反応しない。

女性は、これ以上ないくらい雨に濡れていたが、このまま雨に打たれているのは可哀相だと思って、着ていたジャケットを脱ぐと、女性の細い肩に掛ける。

女性は一瞬、体をビクッと震わせてから、肩に掛けられたジャケットを見て、その後、背後に立つ昭仁をゆっくり振り返った。

心配そうな顔で自分を見ている昭仁を見て、泣いている様な笑みを向けた。

「有り難うございます」

女性の声を聞いて、少し安心した。

「立てますか？」

女性の隣にしゃがみ込み、右手を差し出す。が、昭仁の手を借りずに一人で立とうとした。

女性は足を痛めたのか、腰を少し浮かせただけで、小さな悲鳴を上げた。

ハイヒールの踵（かかと）は無残にも折れて、右足首は、赤く腫れてきている。

「掴まって」

今度は素直に昭仁の手を借りて立ち上がり、ガードレールに腰掛ける。

女性を立たせてみて、初めて見た目とのギャップに気付いた。

遠くから見ていた時は、女性にしてはかなりの長身で、モデル並の身長があるのだと思っていたが、こうして隣に立ってみると、１７０ｃｍに数Ｃｍ足りない小柄な昭仁と、あまり身長差がない。

１０ｃｍのハイヒールを履いていてあまり身長差がないのだから、かなり小柄なのだろう。

雨の中、パタパタと駆け寄って来る足音が背後から聞こえて来た。

何気なく振り返って見ると、駆け寄って来るのは、あの喫茶店のあの若い店員だった。

店員は昭仁の前で立ち止まり、右手に握られたカサを差し出す。

「使ってください」

照れ臭いのか、時間が無いのか、早口で言うと、逃げる様に喫茶店へ戻って行った。

昭仁は心の中で礼を言ってから、カサを開いて女性の上へ差し出す。

「有り難うございます」

礼を言いながら昭仁を見て、彼が濡れていることに気付いた。

「あなたが濡れるわ」

「僕は大丈夫。それより、足は大丈夫？」

昭仁の好意を嬉しく思い、それ以上は言わなかった。

苦笑を浮かべながら、自分の足を見る。

「このハイヒール、お気に入りだったのに」

自分の足よりもハイヒールの方を気にしている女性に、苦笑を向ける。

明らかに腫れている足を心配させまいと戯(おど)けて見せているのか、それとも、本当にお気に入りのハイヒールが台なしになって残念に思っているのか？

後者だ―と、思った。

足は、誰が見ても捻挫だと判るくらい腫れている。

「捻挫だね。病院へ行こう」

「大丈夫です。これ、有り難うございました」

肩に掛けられたジャケットを取ろうとする手を、昭仁が掴んで止めた。

「一人で歩けないでしょ？」

「でも、この近くに病院は無いわ。それにこれは罰よ…」

最後の一言は小さな呟きだったが、昭仁の耳は聞き逃さなかった。

「バチ？」とつい聞き返して、直ぐに恋人との別れの事だと気付いた。

今までの出来事を観察していたのだと知られたかもしれない―と気まずく思い、ユックリと、探るように女性を見る。

女性は、真っ直ぐ昭仁を見つめていた。

女性の大きな瞳を真っ直ぐに見た昭仁は、心の奥深くまで見透かされそうな気がして、気まずそうに作り笑いを浮かべて目を逸らした。

昭仁の明らかに変な態度を見て、全てを見られていたのだと察した。

「見ていたのね」

責める口調ではなく、囁く様な口調だった。

悲しげな笑みを浮かべる女性を見て、申し訳ない気持ちになった。

何か言い訳をしようと言葉を探したが、言い訳が嫌いな昭仁に言い訳のための言葉は見付けられず、無言で苦笑を向けることしか出来なかった。

「人通りが激しいんだもの、見られていても仕方ないわね」

女性の一言で、救われた気持ちになった。

安堵の笑みを浮かべて女性を見て、その笑みは直ぐに消えた。

笑顔でいるのに、その大きな瞳からは、大粒の涙が溢れていた。

「私が仕事に追われて、彼との時間を大切にしなかったから…」

涙と一緒に溢れ出た言葉に返す言葉が見付けられず、無言で俯く。

視線の先には、酷く腫れた女性の足があった。

「取り敢えず病院へ行こう。僕も一緒に行くよ」

「大丈夫です」

「でも痛むでしょ？」

「大丈夫」と答えたかったが、酷く痛んで、足を地面に付けること

すら出来ない状態だった。

「迷惑掛けたくないって思ってるなら気にしないで。僕が勝手にしてることだし、ここでこうして会ったのも何かの縁だもん。最後まで面倒見させてよ」

昭仁の優しさを嬉しく思い、その優しさに甘えてみようと思った。

「じゃあ、お言葉に甘えて」

今までとは違う、控え目で美しい微笑を見た瞬間、女性に心奪われた。

もっと彼女の笑顔を見たい。もっと彼女を笑顔にしたい。そう思った。

# 意識

## 意識

昭仁は、診察室の前にあるベンチに座っていた。

あの場に居合わせたタクシーのドライバーが案内してくれた病院は小さな個人病院で、恰幅（かっぷく）の良い中年の医師と、その妻なのか、同じ名前のネームプレートを胸に付けた看護師は凄くフレンドリーだった。

ただ、夜勤なのか、一人だけ居た若い看護師はムスッとしていて態度が悪かった。

病院へ来た時、3歳くらいの女の子を抱いた若い母親が帰って行き、今は、昭仁達以外、誰も居ない。

普通の人なら、閑散（かんさん）とした雰囲気に、医師への不安を覚えるのだろうが、昭仁にとっては、誰にも邪魔をされない、居心地の良い病院だった。

診察室のドアが開き、診察を終えた女性が出て来た。

右足首には包帯が巻かれて、両膝には大きな絆創膏（ばんそうこう）が貼られた、痛々しい姿だ。

診察室内を振り返って会釈をして、昭仁に対して背を向けてドアを閉めた時、鈍い音と、女性の小さな悲鳴が聞こえてきた。

見ていなくても、ドアに指を挟んだのだと直ぐに判った。

彼女は、ほんの短い時間の間で、幾つものドジを昭仁に見せていた。

「大丈夫？」

側まで行き、笑顔で女性を見る。

振り返った女性は苦笑を向けて、右手の人差し指を握りながら「大丈夫」と答えたが、説得力は無い。

片足を引きずって歩く女性に手を貸そうと、右手を差し出す。

素直に昭仁の手を借りようと右手を伸ばしたが、昭仁の手を掴み損ねてバランスを崩した。

反射神経の良い昭仁が直ぐに反応して、倒れ掛かった女性を抱き支えた。

相手が昭仁でなければ、確実に転んでいただろう。

「有り難う」

体勢を立て直し、今度はシッカリと昭仁の手を掴んでから体を預けた。

ゆっくり歩いて、数メートル離れたベンチまで行く。

ベンチに腰を下ろした時、またバランスを崩してよろけた。が、今度は昭仁がしっかりと支えていたので、転ぶことはなかった。

ただ、昭仁の不安を煽(あお)るには十分な材料だった。
女性のドジ振りを見ていると、一人にするのが不安になる。
女性をベンチに座らせた時、診察室から看護師が出て来た。
「あら、優しいご主人だこと」
笑顔で言う看護師は、二人を夫婦だと思ったらしい。
「僕達、夫婦じゃ――」
昭仁が慌てて否定しようとしたが、看護師は聞く耳を持っていなかった。
二人が夫婦だろうと夫婦でなかろうと、彼女にとっては関係ない。
「奥様にも言いましたけど、一週間は安静にしていて下さいね。何より、ご主人のサポートが必要ですよ」
自分達をすっかり夫婦だと思い込んでいる看護師に否定の言葉は言えず、苦笑しか向けられない。
「痛み止めと湿布です」
看護師から受け取った薬をバッグの中に仕舞う為にバッグを取った時、掴み損ねてバッグを落としそうになった。
慌ててバックを持ち直してバッグは落とさなかった。が、逆の手に持っていた薬を落としてしまった。

深い溜め息をついて、落とした薬を拾おうと手を伸ばした時、ベンチの上に置いたバッグに手を引っ掛けて床に落として中身を床にぶちまけた。

女性は、さっきより深い、苛立ちを含んだ溜め息をついた。

「またやっちゃった…」

“また┃”と聞いて、よくやる失敗なのだと知った。

これ以上ドジをしないように昭仁がバッグとその中身を拾おうとしたが、床に散らばっているモノが女性のモノだと、気を効かせた看護師が手際よく全てを拾い集めて昭仁に渡す。

「こういう物は、ご主人が持つべきですよ。そうそう、随分濡れたみたいだから、早く着替えて、暖かくしてくださいね」

満面の笑みを浮かべて母親の様に言うと、二人に会釈をして歩き去った。

二人きりになって、不意に気まずくなった。

確かに夫婦に見えなくもないが、否定の言葉も言えず、最後まで二人を夫婦だと思ったまま、あの看護師は行ってしまった。

変にお互いを意識してしまう。

「行こうか」

「はい」

このやり取りも夫婦の様だと思い、お互いに苦笑を向ける。
昭仁が手を貸すよりも先に、壁の手摺(てす)りを頼りに立ち上がる。が、手を滑らせたのか、体勢を崩してよろけた。
昭仁は予想していたのか、女性の隣に立っていて、よろけた瞬間、直ぐに手を伸ばして女性を支えた。
「ごめんなさい。ドジばっかりね」
女性の言葉に対して笑顔で応えるが、今までのドジ振りを見ていて、一人で帰すのは不安だと思った。
悩みもしないで、自宅まで送って行こうと決めた。
「家まで送るよ」
「でも―」
「一人で帰すなんて、とてもじゃないけど心配で出来ないよ」
昭仁の言葉を聞いて、彼女も納得した様だ。
赤面しながら、小さな子供の様に、無言でコクりと頷いた。
×××
タクシーに乗り込んで直ぐ、女性はバッグの中から名刺を取り出して昭仁に差し出した。

「こんなにお世話になってるのに、自己紹介もまだよね」

女性の言葉を聞きながら、受け取った名刺に目を走らせる。

彼女の名前は、大橋ルリ。

職業は経営コンサルタント。

ルリの話だと、勤めている会社は小さな会社で、顧客の殆(ほとん)どが中小企業らしい。が、中には著名人や有名人が居ると聞いて、“小さな会社”と言うのは、ただの謙遜(けんそん)だと思った。

昭仁がルリのことをキャリアウーマン風だと思ったのは、間違いではなかった。

一通りルリの仕事の話をしてから、昭仁が自己紹介を始める。

「僕は岡野昭仁。職業は―」

ルリの耳に、昭仁の声は届いていなかった。

酷い目眩(めまい)に襲われていた。

昭仁の声が少しずつ掠(かす)れて、遠くなっていく。

彼の名前は、岡野昭仁。

職業は―。

ルリの意識は、スイッチを切った様に、そこで途切れた。

「―よろしく」

ルリを見ると同時に、ルリの頭が肩に乗った。

一瞬ときめいたが、直ぐに様子が変だと思った。

息が荒く、名前を呼んでも反応は無い。

顔を覗き込んだ時、ルリの額が昭仁の頬に触れた。

僅(わず)かに触れただけなのに、異常に熱いと判った。

そういえば、タクシーに乗った頃から妙に大人しくなり、会話と言うより、昭仁の言葉に相槌(あいづち)を打っているだけだった。

病院でのドジも、もしかしたら熱のせいだったのかもしれない。

改めてルリの額に触れてみる―酷く熱かった。

雨のせいだ。

土砂降りの雨の中、カサも差さずに秋の冷たい雨に打たれたせいで熱を出したのだ。

異変に気付かないドライバーが、詳しい住所を聞いてきた。

タクシーに乗った時、ルリは区名しか伝えていない。

「ルリさん？」

試しに名前を呼んでみる。が、意識は無い様で、返答は無い。
さっきの病院へ戻ることも考えたが、ここからなら自宅へ行った方が近い。
ルリが途中で目覚めることを願いつつ、自宅の住所を伝えた。
偶然にも、ルリと昭仁は同じ区内に住んでいた。

×××

タクシーが昭仁のマンションの前に停まった。
マンションに着いても、ルリは目覚めなかった。
ルリを抱き抱えて車から降りて、ルリの軽さに驚いた。
小柄でスレンダーだと判ってはいたが、予想よりずっと軽かった。
力がある―とは決して言えない昭仁が抱き抱えて歩いても、全然苦にならない。
子供を抱いているようだ―と思ったが、流石（さすが）にそれは言い過ぎだ―と、一人苦笑を浮かべる。
部屋に入ると真っ直ぐ寝室へ向かい、ソッとベッドに寝かせる。
出会って数時間が経つと言うのに、ルリの服はまだ濡れていた。

ジャケットを脱がせて―昭仁の動きが止まった。

濡れた服は、全部脱がせた方が良いだろう。

自分のベッドが汚れるから―ではない。

汚れたベッドは、後でなんとでも出来る。

服を着たままでは寝苦しい。それが濡れていれば尚更だ。

白いキャミソールに手を掛けて―躊躇(ためら)う。

脱がし方が判らない訳ではない。

２４歳にもなれば、、それなりの経験はしている。

だが、意識の無い、びしょ濡れの女性と二人きりで居るこの状況は初めての経験だ。

緊急事態だとは言え、意識の無い女性の服を脱がせるのは気が引ける。

暫く悩んだが、寒さと熱で震えているルリを見て、緊急事態だから―と割り切った。

下着姿になったルリの体に素早く毛布を掛けて、体を隠す。

ルリが目覚めなかったと安堵の溜め息を一つついてから、毛布の中に手だけを入れて、手探りでスカートを脱がせる。

素足だったのは幸いだ。

ソッと、今度はルリを起こさない様にソッと、額に触れてみる。

確実に、さっきより熱が上がっている。

毛布の中で丸くなって震えているルリを見て、熱はまだ上がると確信した。

先に自分の濡れた服を着替えてから、解熱シートを持って寝室へ戻ってきた。

枕元にやって来た昭仁は、ルリの瞳から溢れる涙に気付いた。

外見は強く、冷たい女性に見えるが、本当のルリは見た目とは真逆で、女性が持つ弱さと可愛らしさを持った、女性らしい女性だ。

昭仁は、ルリの大きなギャップに強く惹かれた。

×××

目覚めたルリは、酷い頭痛に頭を抱えた。

ベッドに横になっているのに、目眩がした。

暫くボーッとしてから、額の解熱シートに気付く。

目覚めて直ぐに気付きそうだが、元々低血圧の上、体調の悪いルリの頭は、直ぐに活動せず、気付くのに少し時間が掛かった。

解熱シートの存在に気付いて、何故自分の額にこんな物があるのかとボンヤリ考えるが、まだ眠っているルリの頭では、答えを見付けられなかった。

ダルさと様々な感情が入り混じった溜め息をついてから、部屋に漂う香りが、自分の知っているモノとは違うことに気付いた。

自分の香水とは明らかに違う、男物の香水の香りだ。

何故男物の香水の香りがするのかと考えながら、横になったまま、眼鏡を探す。

眼鏡はケースに入れず、剥き出しのまま枕元に置いてあった。

いつもなら必ずケースに入れて、ベッド脇のテーブルに置くのに―と思い、ケースを探してテーブルを見る。

ベッドの脇には、ある筈のテーブルが無かった。

不思議に思いながら、昨夜の出来事を思い出してみる。

最初に恋人との別れを思い出して、胸が痛んだ。

転んで足を痛めて動けなくなっていた所を親切な男性に助けてもらった。

病院まで一緒に来てくれて、帰りも送ってくれると言ってくれて、一緒にタクシーに乗り込んで―それからの記憶が一切無い。

名刺を出して、自己紹介をした。

彼の名前も聞いた。

彼の名前は、岡野昭仁。

彼の職業は―聞いた気はするが、思い出せない。

酷い目眩がしたのは覚えている。

上半身を起こした時、鈍器で殴られた様な酷い頭痛に襲われて、思わず頭を抱えて蹲(うずくま)る。

痛みが消えてから、眼鏡を掛けて部屋の中を見回す。

やっと、自分の部屋ではないと気付いた。

間取り、窓の位置、カーテンの色、家具とその配置―全てが違う。

ルリの部屋の家具は白を基調にしているのに、この部屋は、真逆の黒を基調にしている。

部屋を見回したルリの目に、ギターと大きなステレオが飛び込んできた。

ここは男性の部屋だ。

化粧品やアクセサリーの代わりにギターやステレオがあるのを見て、そう思った。

ルリの部屋にもステレオはあるが、こんなに大きく、凝った物ではない。

誰の部屋なのかと考えて、直ぐに昭仁のことを思い出した。

慌ててベッドから起き上がり、自分が下着姿だと気付いた。

さっきよりずっと酷く慌てて部屋を見回して、誰も居ないと知って安堵する。

服を脱がせたのは、確実に昭仁だろう。昭仁しか居ない。

濡れた服を脱がせてくれたことに対しては感謝した。が、初対面の男に、決して見られたくない恥ずかしい姿を見られたのだと知って、一人赤面する。

もう一度、今度はゆっくりと部屋の中を見回して、着ていた筈の服を探す。

服は、ハンガーに掛けられて、壁に吊されていた。

急いで、だが、音を立てないように細心の注意を払って着替えた。

ベッドを整えてから、そっと寝室のドアを開ける。

寝室の向こうはリビングだった。

リビングを見回したが、人の姿は見当たらない。その代わり、寝室では見付けられなかった時計を見付けた。

時計の針は、５時を指している。

開けっ放しのカーテンの向こうの空は、すっかり明るくなっている。

雨は降っていないようだ―などと呑気に考えていたルリの耳に、寝息が聞こえてきた。

耳を澄ませてみると、目の前に背中を向けて置かれているソファーから聞こえてくると判った。

そっと、恐る恐る覗き込む。

ソファーの上には、毛布も掛けずに、猫の横に丸くなって眠る昭仁が居た。

寒いのだと思ったルリは寝室から毛布を持って戻り、持ってきた毛布を昭仁の体にそっと、起こさないようにソッと掛ける。

昭仁はやっぱり寒かったのか、眠ったまま、無意識に毛布を肩まで引き上げた。

起きたのかと思って身構えるが、安らかな寝息を聞いて、起きなかったと安堵する。

今、昭仁が目覚めても恥ずかしくて、どんな顔をすれば良いのか判らない。

ルリは１０代の少女ではない。

２８年間生きていれば、色々な経験をしてきた。が、初対面の男性

の前で意識を失い、初対面の男性の部屋に泊まり、初対面の男性に下着姿を見られる経験は、まだしていなかった。

安堵の溜め息をついてから、昭仁を見る。

子供のように眠る昭仁を見て、可愛いと思った。

男性を見て、可愛いと思ったのは初めてだった。

昭仁の額に掛かる前髪を、ソッと指先で退ける。

もっと触れたいと思ったが、起こすかもしれないと、我慢した。

自分から男性に触れたいと思ったのは久し振りだった。

何時も触れてほしいと思うだけだった。

「有り難う。迷惑掛けて、ごめんなさい。必ずお礼に来るわ」

昭仁を起こさないように囁くルリの心の中には、別れたばかりの恋人の存在は無かった。

×××

目覚めた昭仁は、天井を見つめてボーッとした。

頭がボーッとするまで眠ったのは久し振りだった。

やや暫くボーッとしてから時計を見る。

時計の針は、もうすぐ9時になろうとしている。

何時間眠っていたのだろう？　と考えて、不意にルリのことを思い出して飛び起きた。

夕べは寝ずにルリの看病をするつもりだったが、最近、仕事で寝不足が続いたせいで、いつの間にか眠ってしまったようだ。

上半身を起こして、毛布の存在に気付いた。

ルリが用意してくれたのだと気付き、慌てて部屋を見回す。

リビングには、昭仁以外誰も居ない。

ソファーから立ち上がって、寝室へ行ってみる。

ベッドは綺麗に整えられて、誰かが居た形跡も無い。

リビングへ戻り、テーブルの上に置かれたメモに気付いた。

メモには、癖（くせ）の少ない、女性的な字で謝罪と感謝の言葉が書かれていた。

しっかりした字で、意識が朦朧（もうろう）とした状態で書いたのではなさそうだ。が、それでも、ルリが心配でたまらなかった。

熱は下がったのだろうか？

帰る途中で熱が上がり、何処かで倒れているかもしれない。

足の痛みは取れたのか？

途中で座り込んで、痛みで動けなくなっているかもしれない。

ここから自宅まで、無事に戻れたのだろうか？

ここが何処か判らずに、迷子になっているかもしれない。

そんな悲観的なことばかり考えてしまう。

もしかしたら、まだ近くに居るかもしれない―と思って、窓に歩み寄る。

１０階の窓から見える範囲に、ルリの姿は見付けられなかった。

不安に支配されたが、メモに書かれていた“お礼に伺います”と言う言葉を信じて、待つしかなかった。

×××

無事に自分の部屋へ戻ったルリは、直ぐに服を脱ぎ捨てると、下着姿のままベッドに倒れ込んだ。

昭仁のマンションは、ルリのマンションから駅までの間にあり、昭仁のマンションを出て直ぐ、自分が何処に居るのか判った。

自宅まではそう遠くないのだが、熱を出し、足を捻挫しているルリにとっては、遠い道程（みちのり）だった。

無理をして歩いたせいで熱は上がり、足の痛みと腫れは酷くなっていた。

週末は台なしだわ―そんなことを考えているうちに、また眠ってしまった。

次に目覚めたのは、日曜になったばかりの時間―深夜の１２時を少し過ぎた時間だった。

何時間眠っていたのか、朝なのか夜なのか、全く判らない。

ボーッとしながらも、ベッドの下に捨て置かれたバッグの中から携帯電話を取り出す。

待受画面から仕入れた情報は、日付けと時間、３件の着信と５件のメールだった。

メールや着信の確認もしないで、携帯電話をベッドの上に放り投げる。

熱を計ってみると、３７度を少し超えた辺りだった。

今は、熱よりも鼻水と咳、喉の痛みが酷い。

「苦しい…」

そう言った自分の声は嗄れて、男の様だった。

彼が聞いたらきっと笑うわ―と思い浮かべた顔は、１年半の付き合いの後、婚約までしたのに破局を迎えた恋人ではなく、昨日会ったばかりの昭仁の顔だった。

顔を覚えるのが苦手なルリの脳裏に、昭仁の困ったような笑顔がハッキリと浮かんだ。

一度しか会っていない人物の顔を覚えているのは、奇跡に近い。

何故、こんなにハッキリ昭仁の顔を覚えているのか、ルリにも判らなかった。

## 見抜けぬ正体

見抜けぬ正体

週明けの月曜日、全社員が出勤していると言うのに、ルリの姿だけがそこになかった。

仲間達は、何時もなら一番乗りをしている筈のルリがまだ出勤していないことに気付いて、不思議に思う。

彼等が知っている限り、ルリが無断欠勤をしたことはない。

後１０分で始業時間だと言う時間に、「お早うございます」と誰かがやって来た。

聞き覚えのない声を聞いて、一斉に入り口を見る。

入り口には、腫れぼったい目にマスクをして、右足首に包帯を巻き、両膝に大きな絆創膏を貼った、痛々しい姿のルリが立っていた。

一年の災難が一度にやって来たような酷い姿のルリを見て、訝しげだった仲間の顔が、一斉に驚きの表情に変わった。

「どうしたんですか？」

後輩の亜由美がルリに駆け寄り、ルリのバッグをルリの代わりに持つ。

「足は？　捻挫？」

同僚の綾子が来て、ルリに手を貸して席まで連れて行き、イスに座るのを手伝う。

ルリがイスに座ると、綾子も隣の自分の席に座る。

「ドジなルリのことだもの、彼も看病には慣れたんじゃない？」

悪戯っぽい笑みを浮かべて、茶化すように言う。

ルリの性格を本人以上に知っている彼女は、ルリが照れながらも「うん」と言うと思っていた。が、意外にも、ルリは無言で苦笑を向けた。

プライベートでも親密な付き合いをしている辻綾子は、ルリの苦笑を見ただけで何かあったのだと察した。

「もう大丈夫よ。有り難う」

ルリが笑顔で礼を言うと、仲間達はルリの事を心配しながら、それぞれの席へ戻る。

そんな中、綾子だけはその場に残った。

辺りを見回し、側に誰も居ないことを確認する。

仲間達は、これからの仕事の準備で忙しそうで、ルリと綾子の事など気にしていない。

「何かあったの？」

周りに誰も居ないと確認したが、それでも周りに聞こえないように、声のトーンを落とす。

「彼と別れたわ」

衝撃的なことを普段と変わらない様子で、サラリと言う。

別れを吹っ切れたからサラリと言えた訳ではない。

ルリの強がりだと思った。

「何で？」

思っていたより辺りに声が響いて、思わず両手で口を押さえて辺りを見回す。

仲間達は二人に一瞥を与えただけで、あまり気にしていないようだ。

ルリに向き直って、また声のボリュームを落とす。

「先週、婚約したばかりでしょ？」

「他に護りたい女性が居るって。君は強い女性だから、一人でも大丈夫だろうって言われたわ」

ルリにとっては聞き慣れた別れの言葉だった。

聞き慣れてはいたが別れに慣れた訳ではない。

「他に女が居たの？　酷いわ！　それで泣き腫らした様な顔をしているのね」

「そんなに酷い顔？」

嫌な空気から逃れたくて、わざと戯(おど)けて見せた。が、綾子には通用しなかった。

「今日は家で休んでた方が良いわ。その顔じゃ、人に会えないでしょ？」

「辻君の言う通りだ」

不意の男性の声に驚いて、二人同時に振り返る。

背後から話に割り込んできたのは、二人の雇い主―この会社の社長だった。

さっき辺りを見回した時、人影は無かった。

「ここのところ仕事に追われて、満足に休んでないだろう？　有給を全部使うつもりで休みなさい。心の傷を癒すには、旅行が良いぞ」

心の傷を癒すには、旅行が良いぞ」

何時からそこに居て、どの辺りから話を聞いていたのかと言う疑問は、最後の一言で解消された。

多分、彼と別れた―辺りから聞いていたのだろう。

「でも―」

「資料さえ用意してくれれば、私が対処するわ」

「私達もお手伝いします」

ルリ達の話を聞いていた仲間達も、社長と綾子の提案に賛成した。

「有り難うございます。それでは、資料が整い次第帰ります」

ルリが申し訳なさそうな顔で頭を下げると、社長は納得したように一つ頷いて、社長室に消えた。

×××

ルリは、終業時間より少し早く、１６時頃退社した。

資料を纏(まと)めるだけで、ほぼ一日を使ってしまった。

自分がどれだけ仕事に追われていたのか、改めて思い知った。

朝から晩まで、仕事の事しか考えていない。

もっと器用なら、仕事と恋愛の両立が出来るのだろうが、生憎ルリは不器用で、一つの事にのめり込み、他の事が見えなくなる性格だった。

これじゃあ恋人にも愛想を尽かされて、他に好きな人が出来ても仕方ないと思った。

駅へ向かって歩いていると、捻挫した足が痛みだした。

何処かで休みたい―そう思って辺りを見回す。

直ぐ側に喫茶店を見付けて、休んで行こうと決めて歩き出す。

途中、ＣＤショップの前を通った。

入り口には、誰だか判らないアーティストのポスターが沢山貼られている。

沢山のポスターの中に、見覚えのある顔があった。

何処で見たのか、考えてみる。

顧客の中に居たかしら？

いや、顧客の中に、芸能人の類いは居ない。

では何処だろう？　と考えて、直ぐに諦めた。

他人の顔を覚えるのは苦手だ。

弱視で良く見えないせいもあるが、皆同じ顔に見えるのだ。

その代わり、声や雰囲気等の視覚以外からの情報や、文面からの情報は絶対に忘れない。

ある意味、特別な能力と言える。

ルリが見ていたポスターの人物は、間違いなく昭仁だった。が、何時もと違う雰囲気が、ルリに別人だと思わせた原因だった。

昭仁の曲は、ルリも好きで良く聴く。が、残念な事に、昭仁の顔と名前は、ルリの記憶にインプットされていなかった。

曲を聴く上で、タイトルとアーティスト名は、ルリに必要無い。

気に入った曲だけを聴くのがルリで、曲を手に入れる為に必要不可欠なタイトルやアーティスト名は会社の後輩が持っていて、ルリの質問にピンポイントで答えてくれて、ルリが欲しいと思っている曲を手に入れてくれるのだ。

好きなモノは無条件で好き―それがルリだった。

×××

昭仁は、偶然にも、ルリが歩いていた道を同じ方向へと歩いていた。

このまま歩いて行けば、この先の喫茶店でルリが休んでいる。

だが、たった今、通り過ぎようとしている喫茶店でルリが休んでいるとは知らない昭仁は、脇目も振らずに歩いて行った。

一方ルリは、偶然窓際のテーブルに着いていて、目の前を通り過ぎる昭仁に気付いた。

呼び止めようと思って慌てて立ち上がったが、直ぐにユックリと座

り直す。

礼を言う為に呼び止めようと思ったのだが、下着姿を見られた事を思い出し、どんな顔をして会えば良いのか判らない。

イスに座り直した時、昭仁の顔を何処かで見た―と思った。

つい最近。たった今。

今度は必死に、今までにないくらい必死に思い出す。が、直ぐに諦めた。

自分が他人の顔を覚えられない事は、人に言われなくても判っている。だが正直、ここまで酷いとは思っていなかった。

顔を覚えられない事が、こんなに困る事だとは思っていなかった。

思い出すのを諦めて、喫茶店を出ることにした。

イスから立ち上がって、右足に体重を掛けてみる。

足の痛みは、すっかり取れていた。

×××

テレビを付けていながら、ルリの視線は一度もテレビに向けられず、音も耳には届いていないのかと思うくらい、読書に没頭していた。

一心不乱に本を読んでいたルリだが、目が疲れたのか、不意に顔を上げて、壁に掛かっている時計を見る。と、8時になろうとしてい

た。

時間を知った途端、空腹を覚えた。

徐(おもむろ)に本を閉じると、一つ大きな伸びをして、ソファーから立ち上がる。

何気なく、付けっ放しのテレビに視線を送ると、これから音楽番組を始めると予告していた。

軽い食事を取りながらテレビでも見ようと思い、眼鏡を外してからキッチンへ向かう。

テレビが番組を始めると告げるが、ルリの視線はテレビに向けられない。

ルリの視力では、数メートル離れただけのこの距離からでも、テレビ画面が見えない。

弱視のルリは、コンタクトや眼鏡などを利用して矯正してもあまり効果は無い。

普段はコンタクトだけを使用して、仕事時は更に眼鏡を使用して視力を上げている。

コンタクトだけで裸眼と大して違いのない今、テレビ画面は見えないと判っているから、見ようとしなかった。

次々と名前が呼ばれて、沢山の拍手が聞こえる。

出演者の紹介をしているのだろう。

数人の出演者の中に、“アキヒト”の名前を聞いた。

視力が弱い分、耳は抜群に良いルリだが、聞き間違いかと思った。

確認する為にリビングへ戻り、眼鏡を掛ける。が、既にアキヒトの姿は無かった。

自分が知っている現実の昭仁と、非現実的なテレビの中の“アキヒト”が同一人物だとは思わないが、どのくらい違うのか、何となく興味を持った。

このまま番組を見ていれば、そのうちその姿が見られるだろうと気楽に構えて、眼鏡を外してキッチンへ行く。

基本的に、眼鏡は嫌い—眼鏡を掛けた自分の顔が嫌いだった。

キッチンへ行くと同時に、テレビの中の司会者が“アキヒト”の名前を呼んだ。

最初に歌うと知って慌ててリビングへ戻り、眼鏡を掛けてテレビを見る。と同時にＣＭになった。

苛々しながら、今度は見逃すまいとソファーに腰掛ける。と、今度はドアベルが鳴った。

急な来客で、テレビに集中出来ない苛立ちを隠さず、渋々玄関へ向かう。

「はい？」

「私」

ドアの向こうから聞こえてきたのは、綾子の声だった。

ドアを開けて、綾子を招き入れる。

「どうしたの？」と聞きながら、テレビの音を気にする。が、ボリュームが小さすぎて、流石のルリにも聞き取れない。

「遊びに来たわよ」

満面の笑みの綾子の手には、缶ビールが入った袋があった。

「入って」とルリが言う前に靴を脱ぎ、リビングへ向かっていた。

綾子を追う形でリビングへ行くと、テレビの中で“アキヒト”と司会者が話をしていた。

今度は、シッカリとその声が聞こえた。

男性にしては少し高めの独特なその声は、何処かで聞いたことがある。

テレビや電話など、間接的に、ではない。

直接、この耳で聞いた。

誰の声なのか、何処で聞いたのか、記憶を探る。

視線をテレビ画面に向けるーと同時に画面は切り替わり、“アキヒト”の姿は消えた。

まるで“アキヒト”の姿を見せまいと邪魔しているようだと思い、その姿を見るのは諦めた。

「今日、彼にそっくりな人が会社の前に居たわよ」

「彼って？」

キッチンへ行き、コーヒーを淹れながら、綾子との会話に専念する。

「今のミュージシャン。亜由美ちゃんが、絶対に本人だって言い張ってたわ。私もチラッと見たけど、こうして見ると確かに似てるわね」

「ウチの会社に来てた訳じゃないんでしょ？」

ビールを飲む為のグラスを綾子に渡して、向かい合ったソファーに座る。

テレビに背を向ける姿勢だ。

「まあね。ビルの前に居ただけだし。飲む？」

袋からビールを取り出して、ルリに差し出す。

ルリが断ると知った上で差し出した。そして思っていた通り、ルリは断った。

「まだ体調も万全じゃないし、大切な有給を二日酔いで過ごしたくないわ」

「それもそうね」

アッサリと差し出していたビールを引っ込めると、自分で飲む為に開けた。

## CUPID―キューピッド

Ｃｕｐｉｄ―キューピッド―

昼食を取る為に外出した綾子は、街路樹に隠れてビルの入口を見ている若い男性を見付けた。

直ぐに、昨日の夕方、同じ場所で、同じ様にビルを見ていた人物と同一人物だと判った。

昨日の風景を、そっくりそのまま再現している。

ルリとは逆で、一度見た顔は絶対に忘れない。

このビルには、いくつもの会社がテナントとして入っているのから、自分が勤める会社に用があるとは限らない。

どの会社に用があるのか？

何の為にそこに居るのか？

男性に興味を持った綾子は、少しの間だけ彼を観察してみようと思い、入り口近くのベンチに腰掛けると、カモフラージュの為に、バッグから携帯電話を取り出す。

男性―昭仁の方と言えば、自分が観察されているとは思いもせず、目立たない様に、人通りが激しくなった頃を見計らって、人込みに紛れてビルに近付いた。

入り口横の壁に、テナント名が書かれたプレートが掲げられていると知って、手元の名刺を一度見てから、プレートに目と指を走らせる。

綾子は、昭仁の指先が、自分の勤める会社の名前の上で止まったのを見逃さなかった。

直ぐにベンチから立ち上がり、思い切って声を掛けてみる。

「あの」

背後から声を掛けられて、飛び上がる程驚いて振り返る。

昭仁の顔を間近で見て、ミュージシャンの岡野昭仁だと確信した。

「驚かせてしまってすみません」

謝ってからバッグから名刺を取り出して、昭仁に渡す。

名刺を受け取った昭仁が名刺に目を通すのを確認してから―。

「私どもの会社に、何かご用でしょうか？」

尋ねながら、昭仁の手にある名刺に目を走らせる。

ルリと違って視力の良い綾子は、名刺に書かれたルリの名前を見逃さなかった。

「その名刺…」

手に持っている名刺を見られたと知って、慌てて隠そうとした。が、もう遅いと諦めた。

「大橋に、何かご用ですか？」

「はい。あの…大橋さんは？」

綾子の訝しげな顔を見て、気まずく思った。

絶対に、怪しい人間だと思われているに違いない。

相手が初対面でも、嫌われるのは嫌だった。

「今日は、出勤してますか？」

「大橋は、昨日から休暇を取ってます。あの…」

最後の一言は、今までの様に事務的な声と話し方ではなく、素に近い。

「失礼ですけど、大橋とは、どういった関係ですか？」

「それは…」

そう言ったきり、困った様な笑みを向ける。

目の前の女性は、ルリとどのくらい親しいのだろうか？

何処まで話せるのか、判らない。

勘の鋭い綾子は、昭仁の態度を見て、何かあると感じ取った。

「時間、あります？」

「え？」

「私、これから昼食に行くので、付き合って下さい」

「付き合うって…」

昭仁のはっきりしない態度を見て、強引に行くべきだと判断した。

「時間が無いの」

戸惑っている昭仁の腕を掴むと、無言で歩き出した。

×××

昭仁と綾子の二人は、会社近くのレストランに居た。

昭仁は気まずげに俯き、綾子は、昭仁の微かな表情の変化も見逃すまいと、身を乗り出して昭仁の顔を見つめて向かい合っている。

綾子の自己紹介は終わり、ルリと親しい友人だと知って、何処まで聞かれるのか、何処まで話して良いのかと、密かに悩んでいた。

「あなた…」

綾子の声を聞いて、何を言われるのかと緊張する。

「ミュージシャンの岡野昭仁よね？」

一応、周りに聞こえないように声のトーンは落としている。

綾子は、目の前の人物がミュージシャンの岡野昭仁だと確信していながら聞いてみた。

確認の為と言うより、昭仁の人間性を確かめる為に聞いた。

嘘を付くのか、上手くごまかそうとするのか、それとも、素直に認めるのか。

昭仁は無言で、少し照れながら頷いた。

嘘は嫌いだったし、ごまかして後で責められるのも怖かった。

綾子は納得した様に頷くと、イスに深く腰掛けて、無言で昭仁を見つめる。

ルリから昭仁の事は聞いていない。と言うことは―。

「ルリ―大橋と知り合ったのは社外よね？」

そう聞いたのには理由がある。

ルリと綾子の二人は、仕事でもプライベートでも、どんなに些細な事でも報告や連絡をするくらい深い仲なのだ。

社内で会っていれば、その日のうちに綾子に話している筈だ。

お互い、初対面の客が居れば、若いとか、ハンサムだとか、変わった人だとか、必ず話題に上るのだ。

プライベートでは、恋愛の話もする。

だが、ルリから彼の事は聞いていない。だから社外で会ったのだと思った。

綾子が思っていた通り、昭仁は「はい」と答えた。

「知り合ったのは何時？」

聞かれて、ルリと知り合った経緯を素直に話した。

嘘を付く必要は無い。

「先週末の金曜日―」と聞いて、ルリが恋人と別れた日だと思った。が、何も言わずに昭仁の話を聞く。

ルリが怪我をして、病院へ連れて行ったことを話した。が、病院からの帰りに高熱を出して意識を失い、自宅へ泊めたことは言わなかった。

隠さなければならない事ではないが、わざわざ他人に話す事でもない。

「あの子が振られるところを見ていたのね？」

綾子の鬼の様に怖い顔を見ると、「見た」と答えたら酷く怒られるのではないかと思ったが、後で嘘を付いたことがばれて責められる

方が怖かったから、正直に「見たよ」と答えた。

「笑顔で別れを告げてた」

「やっぱり…」

不安げな顔で溜め息をつくと、昭仁が不思議そうな顔で綾子を見る。

「あの子、厳しい時程笑顔になるの。あまり落ちる子じゃないんだけど、一度落ちるとなかなか浮上出来なくて。今回は婚約までした相手だし、もっと酷いかも…」

確かに、泣きたい程辛い時は、涙より笑みが顔を見せる。

昭仁も同じだ。が、それは、一番危険な状態を表す。

「心配だな…」

昭仁の口から溢れた無意識の言葉を聞いた綾子の目が、妖しく輝いた。

昭仁の反応は、綾子が思っていた通りの反応だった。

「ルリの事が好きなの？」

敢えて疑問形で聞いた。

単刀直入に質問されて、答えに困った。

「好き…なのかな？　気になって仕方ないし、あの大きなギャップ

には惹かれてます」

自分の気持ちに嘘を付かない昭仁を見ていて、気分が良かった。

「連絡先は聞いてる？」

「いいえ」

「私が教えても良いんだけど―」

それじゃ面白くないわ―と、何かを思い付いたのか、昭仁の顔を見る綾子の顔には、悪戯っぽい笑みが浮かんでいる。

「今夜、一緒に行ってみる？」

綾子の顔を見て、悪戯を思い付いた子供の様だと思った。

「一緒にって？」

「もちろん見舞によ」

バッグの中から名刺を取り出して、その裏に携帯電話の番号を書いて昭仁に渡す。

「今夜６時に電話してちょうだい」

昭仁の都合や意見は一切聞かない。

昭仁が優柔不断で、申し出を断れない性格なのだと、少し話をしただけで見抜いてしまった。

ルリが今まで付き合ってきた男達とは、真逆のタイプだった。

「ルリと付き合って、ルリの心の傷を癒してほしいの」

「僕が？！」

驚く昭仁に対して、綾子は至(いた)って真面目だった。

冗談で言っているのではないと思った。

「恋の傷は、恋で癒すべきでしょ？」

「僕で良ければ」

綾子の考えに共感し、ルリに惹かれていた昭仁に、断る理由は無かった。

「でも、どうして僕なんですか？」

昭仁の質問を先読みしていたのか、直ぐに答えが返ってきた。

「ルリは、一度落ちたら浮上出来ないって言ったでしょ？」

昭仁に話した内容は、こんな事だった。

ルリは意外と惚れっぽく、その人の外見を見て意識し始める。

だが、外見を好きになっても、性格的なところで許せないところを見付けると、一気に熱が冷めるのだ。

そんなルリは少し変わり者で、なかなか付き合える男性を見付けられない。

綾子と知り合った頃に付き合い始めた恋人も、前の別れから一年以上が経って、沢山の友人からの紹介があったから見付けられたのだ。

その彼とは、些細な事が原因で喧嘩になって、破局を迎えてしまった。

その後、かなり落ち込み、食事も喉を通らなくなってしまった。

段々と弱っていくルリを見ていられなくなった友人達が、何人もの男友達を紹介して、やっと付き合うまでに至ったのが、先日別れてしまった婚約者なのだ。

一年半付き合い、婚約までした相手からの裏切りは、ルリの心に深い傷を残した筈だ。

「見たところ、まだ落ちてはいないみたい。多分、あなたの存在があるからよ。ルリは、助けてくれたあなたの事が気になって仕方ない筈だわ。あなたに迷惑を掛けたって気になってる筈よ。あの子は、そんなところから相手を意識し始める、変わった子なの」

喜んで良いものなのか、複雑な気持ちだったが、彼女の落ち込んだ姿は見たくないと思った。

「僕で力になれるなら何でもします」

「じゃあ、今夜、電話して」

綾子の言葉に、昭仁は無言で頷いた。

×××

ルリはソファーに座り、一人悶々としていた。

手には、一枚のＣＤが握られている。

偶然見付けたＣＤのジャケット写真を見ていると、何故か昭仁を思い出す。

それもその筈で、ジャケットの人物は昭仁なのだ。が、あまりハッキリ写っていない写真と雰囲気の違いが、昭仁だと思わせなかった。

安静にしていたからか、足の痛みもかなり取れた。

仕事も、休暇を取って時間が出来た。

昭仁の所へお礼に行かなくちゃ―と思うが、恥ずかしい姿を見られたと思うと、なかなか行く決心が付かない。

それでも、助けてもらってお礼に行かないわけにはいかない。

決心すると、ソファーから立ち上がった。

元々、クヨクヨと悩むのは嫌いだった。

思い立ったら直ぐに行動に移るのが、ルリの良い所だ。

バッグを手に取った時、ドアベルが鳴った。

これから出掛けようと思っていたのに―と苛立ちを感じながら、ドアを開ける。

そして、ドアを開けた姿勢のまま、凍り付いた。

ドアの前には、困った様な苦笑を浮かべている昭仁が居た。

驚きで言葉を失っていると、ドアの陰から綾子が顔を出した。

「ビックリした？」

綾子の悪戯っぽい笑みを見て、綾子が企んだのだと気付いた。

「綾子」

「入れてくれないの？」

ルリが怒り出す前に、説明しなければならない。

「どうぞ」

憮然とした態度で二人を招き入れる。

昭仁は礼儀正しく「お邪魔します」と言って入ったが、綾子は何時も通りだ。

ルリがドアを閉めてリビングへ行くと、綾子は所定の位置―ＴＶの正面に置かれたソファーに腰掛けて、昭仁は、どうしたら良いのか判らず、ドアの前に立っていた。

ルリがリビングへやって来て「どうぞ」と勧められて、初めてソファーに腰掛けた。

「彼がね、ルリの事を心配して会社に来てくれたのよ。それでここに案内したんだけど、いけなかった？」

「いけないなんて」

キッチンでコーヒーを淹れながら、二人を見ないで言う。

コーヒーを淹れていたせいもあるが、昭仁に下着姿を見られたと思うと、恥ずかしくて昭仁の顔を見られない―と思っていたが、実は違った。

ルリは、昭仁を異性として意識し始めていた。

異性として意識し始めると、相手の顔を見られなくなる癖が、ルリにはあった。

無意識の行動だから、ルリ本人は気付いていない。が、ルリの事をルリ以上に知っている綾子は、ヤッパリと思った。

何とかして二人きりにしたいと、色々考えた。が、なかなか良いアイデアが浮かばずにいると、綾子のバッグの中で携帯電話が鳴った。

電話の相手を画面で確かめると、後輩の亜由美だった。

仕事での呼び出しだと思った。

「もしもし？」

話しながら、リビングを出て玄関へ行く。

３０秒程で戻って来た綾子は、申し訳なさそうな顔をしていた。

「亜由美ちゃんから呼び出しだわ。１時間くらいで戻れるけど、先に帰っててちょうだい」

ソファーに置いてあったバッグを持つと、二人の返事を聞かずに出て行った。

残された二人は無言になり、気まずくなった。

向き合って座り、お互いに俯いている。

昭仁は、自分の思いを伝えるのは今しかないと思った。

「あの…」

意を決して顔を上げる。が、ルリの顔を見ると、言葉が出てこない。

「足の怪我は？」

聞きながら、自分を情けないと思った。

「お蔭様で、すっかり良くなったわ。有り難う」

「体調も良さそうだね」

「ええ。ご心配を掛けたみたいで、本当にごめんなさい」

「心配したのは、君と縁があって、偶然あの場所に居たからだけじゃないよ」

「え？」

綾子が二人きりにしてくれて、チャンスを与えてくれたのだ。

綾子の気持ちを台なしにしたくない。

「ルリさんの事が好きなんだ。付き合ってくれないかな？」

恥ずかしくて耳まで赤くなっていたが、真っ直ぐルリを見つめる。

「冗談でしょ？」

昭仁の告白から逃げる為の言葉ではない。昭仁の言葉が信じられなかった。が、昭仁の真摯な目を見て、本気だと気付いた。

「本気だよ。知り合った時から気になって、放っておけなくて、護りたいって思ったんだ」

ルリは、戸惑いを隠せなかった。

「あの時は助けてもらって感謝してるわ。でも…」

どう見ても昭仁の方が年下で、年上の自分の事を好きになるとは思えなかった。

昭仁の言葉は、昭仁の事を異性として意識し始めているルリにとっては凄く嬉しかった。が、それ以上に、不安の方が大きかった。

別れたばかりで自分に自信を無くしている今、年下の彼氏の心が若い女性に揺らいでも引き留められる自信は無い。

例え年上と付き合ったとしても、若い女性に気持ちが行かないとは言い切れない。が、その可能性は年下よりも低いだろう。

「気持ちは凄く嬉しいけど、付き合うのは無理よ」

「どうして？」

昭仁の純粋な瞳を見て、胸が苦しくなった。

彼と付き合って、恋人の関係が長く続くとは思えない。

何時か、必ず自分よりも若い女性を選ぶのだ。

傷付くと判っていて付き合える程、ルリは強くなかった。

「年下はタイプじゃないの」

思ってもいない言葉を口にして、傷付いた様子の昭仁を見て、心が痛んだ。

自分の心が傷付かないように嘘を付いて、昭仁の心を傷付けた。

泣きたい程心が痛んだが、本当の事は言えなかった。

そして昭仁は、ルリの言葉が嘘だと見抜いた。いや、嘘だと思いたかった。

ルリが人を傷付ける筈がない。

また強がっているだけだ。

実際、目の前のルリは、苦しそうな顔でそっぽを向いている。

「俺、諦めないよ。俺の事を好きにしてみせる」

急に昭仁が立ち上がり、ルリは酷く驚いた。

「これ、俺の携帯電話の番号です。ルリさんはきっと教えてくれないだろうから、綾子さんから聞きます。良いですよね？」

昭仁の事を知っている人間が見たら、こんなに強引な彼を見たことがないと、酷く驚くだろう。

ルリは何も言えず、ただ昭仁を見上げるだけだった。

「また来ます」

深々と頭を下げると、ルリを振り返ることもなく出て行った。

×××

落ち込んだ気持ちでルリのマンションを出ると、女性の声が昭仁の名前を呼んだ。

驚いて顔を上げた綾子の目の前には、不思議そうな顔の綾子が居た。
綾子は二人の事が気になり、亜由美からの呼び出しを断って戻って来たのだ。
「帰るの？」
「帰ります」
元気の無い昭仁を見て、何かあったのだと察した。
「何かあったの？」
聞きながら、何があったのか想像出来た。
「振られました」
やっぱり―と思う。
ルリの事は、ルリ本人よりずっとよく判っている。
婚約を破棄されたばかりの今、自分に自信を無くし、これ以上傷付きたくない、何も信じられないと思っているだろう。
だが、ルリが何を言ったとしても、それは本心ではない。
ルリは、確実に昭仁を異性として意識している。
何か切っ掛けがあれば、直ぐに恋愛感情へ変わる。

昭仁の告白は、その切っ掛けになった筈だ。

「一度振られただけで諦めるの？」

綾子の挑戦的な目を見て、「まさか」と否定した。

「何度振られても諦めませんよ。でも、流石に一発目はキツイかも…」

「ルリが何て言ったか判らない―まあ、大体の予想は出来るけど―でも、本心じゃない筈よ。判ってあげて」

「判ってます。確かにへこんでるけど、大丈夫です」

「頼もしいわね」

心の底からそう思った。

「ルリさんの電話番号、教えて下さい。ルリさんには話してありますが。かなり強引ですけど」

昭仁の“強引”と言う言葉を聞いて、気弱そうに見えるが、いざという時は男らしく行動出来るのだと、感心した。

「ＯＫを貰ったんなら良いわよ」

綾子は快く了解して、ルリの携帯電話の番号を教えた。

×××

綾子と別れた昭仁は、真っ直ぐ、仕事場であるレコーディングスタジオへ向かった。

ドアを開けて入って来た昭仁を見た仲間達は、直ぐに昭仁の異変に気付いた。

挨拶をした後は終始無言で俯き、何か考え込んでいる様子で、仲間達が声を掛けても、気持ちの篭っていない生返事が返ってくるだけだった。

そんな昭仁を見た仲間の一人が、ソファーに座る昭仁の隣に腰掛ける。

「どうした？」

そう尋ねたのは、昭仁とは高校からの親友―緒方晴彦だった。

「何かあったのか？」

晴彦に聞かれて、苦笑を向ける。

「いや、何でもないんだ」

昭仁の言葉が嘘だと、長い付き合いの晴彦は見抜いた。

昭仁が嘘を付く時、絶対に相手の目を見ない。

今も昭仁は目を逸らして、晴彦を見ようとしない。

「俺に嘘は通用しないの、判ってるだろ？　悩みなら言ってみ？」

優しく言っても、なかなか話そうとしない昭仁を見て、悩みの原因に気付いた。

大勢の人が居る中で話せない話と言えば、プライベートな恋愛の話だろう。

意外と見栄っ張りな昭仁は、他人に弱みを見せようとしない。

答えを見付けると、ニヤリと怪しげな笑みを口元に浮かべた。

「女か」

声のトーンを落とした晴彦の言葉を聞いて、驚いた表情で晴彦を見る。

「何で判る?!」

否定せず、思わず認めてしまう昭仁が好きだった。

「無駄に8年も付き合ってねぇぞ。で？　ヒト君を悩ませる女は、どんな女だ？」

幼い頃、昭仁が母親から呼ばれていた呼び名で呼び、冗談っぽく言っているが、親身になって相談に乗ってくれる男だと判っているから、腹も立たない。

何処か、綾子に似ていると思った。

「年上のキャリアウーマン」

俯いたまま呟く昭仁の言葉を聞いて、晴彦は酷く驚いた。

「年上？！　お前が？！」

「お前がって、どういう意味だよ」

微かな笑みを向けるが、直ぐに真顔になって俯く。

笑う気分ではなかった。

その反応を見て、昭仁が本気なのだと知った。

「だって、護ってあげたくなる様な、年下の、か弱い女が好みだろ？　年上は護って言うより、護られる感じじゃん」

確かに、昭仁の好みは、晴彦が言う通り、背が低くて、華奢でか弱そうな女性だ。

その点、ルリは、冷たい印象から、一人でも強く生きられそうな女性に思える。が、昭仁は、強く見えるルリの、本当は弱い心や、意外に少女のように可愛らしい姿を見て、護るべき女性はルリだと思った。

「でも年上かぁ。落ち着いて見えるけど、実はお子様なお前には、年上の方が合うかもな」

「俺は彼女が好きなんだけど、彼女の方が年下はタイプじゃないって」

「年下は頼りないから？」

世の中の女性達が、年下の男と聞いてよく言う台詞だ。

年上が好みの晴彦は、この台詞で何度か玉砕を食らった事がある。

ルリが昭仁を選ばない理由だと晴彦が思うのも当然だ。が、無言で首を横に振る昭仁を見て、不思議に思う。

「彼女の親友に相談したんだけど―」

綾子の話を所々端折（はしょ）りながら、だが、大切な所は一言一句変えずに伝えた。

話を聞き終えた晴彦は、胸の前で両腕を組んで「うーん」と唸りながら考え込んだ。

昭仁の話は、大きな驚きだった。

今や昭仁は、老若男女問わず、誰もがその存在を知っているアーティストだ。

顔や歌は知らなくても、その名前だけは、必ず一度は耳にしている筈だ。

そんな昭仁を受け入れない女が居るなんて、信じられなかった。

晴彦の好奇心が強く刺激された。

「合わせてよ」

晴彦がそう言うと判っていたのか、驚きもしないで、溜まりつつあった諦めの感情を溜め息と一緒に吐き出した。

「会わせるったって、今週末からツアーだぜ？」

「だから、その前に会わせろよ。連絡先は聞いてる？」

「知ってるよ」

「俺が話すから掛けてよ」

強引な晴彦に対して、絶対に嫌と言えない昭仁がそこに居た。

渋々ながら、ソファーの上に丸めて置いてあった上着のポケットから携帯電話を取り出す。

戸惑いながらも、ルリの番号を選ぶ。

発信ボタンを押そうか、それとも止めようかと悩んでいると、横から晴彦の手が伸びてきて、昭仁の手から携帯電話を奪い取り、相手の名前を確かめる。

「ルリさんか」

独り言の様に言うが、目は、シッカリと昭仁を見ている。

オロオロとしている昭仁を見る目は、何かを企んでいる目だった。

昭仁は、晴彦の指先が動くのを見た。

小さな声で「あ」と言ったが、晴彦はお構い無しだった。
昭仁の耳にも、受話器の向こうのルリの声が微かに聞こえた。
―もしもし？
受話器の向こうのルリの声は、訝しげだった。
さっき別れたばかりなのに、一体何の用だろう―と思っているのではないかと不安になる。
「初めまして。昭仁の友人の晴彦って言います」
物怖じしないのが晴彦らしい。
「昭仁からあなたの話を聞いて、是非会ってみたいと思って電話したんです。これから会えませんか？」
―これから？
「駄目ですか？」
晴彦の甘える様な声を聞いて、ルリの母性本能がくすぐられた。
晴彦は、年上に対する甘え方を妙に心得ている。
晴彦は昭仁と逆に年上が好みで、年上としか付き合ったことがない。
―判ったわ。

会う場所と時間の約束を取り付けた晴彦は、笑顔で電話を切った。
電話を昭仁に返しながら、自慢げな顔で昭仁を見る。
台詞を付けるとしたら「どうだ！」と言うのが、一番しっくりくるだろう。

×××

居酒屋の前に、昭仁の姿があった。
お気に入りのニット帽を目深に被り、黒縁のダテ眼鏡を掛けて、左右をキョロキョロと見回しながら、ルリを待っている。
会いたいから、来てほしい。
だが、振られたばかりで会わせる顔がないから、来ないでほしい―そんなジレンマを抱えていた。
振り返った時、角から現れたルリを見付け、嬉しくて、口元が緩んだ。
昭仁の前に立ったルリは、照れた様な笑みを浮かべた。
男性に呼び出されたのは何ヶ月振りだろう？
婚約者が居た頃でも、ルリが呼び出さなければ、何日も会えない日が続く。

だから、毎回ルリが呼び出していた。

「急に呼び出したりしてごめんね」

「大丈夫よ。最近引き篭っていて、ストレスが溜まっていたの」

「良かった。皆が待ってるんだ」

待っているのは友人の晴彦ではないのかと疑問に思ったが、昭仁に背中を押され、疑問を口に出す暇もなく、居酒屋へ入って行った。

×××

個室のドアを開けると同時に、沢山の拍手と男の雄叫びが溢れて、ルリは酷く驚いた。

昭仁が皆と言ったのが理解出来た。

個室には、昭仁を含めて、６人の男が居た。

ほぼ全員が若い男性で、かなりお酒が入っているのか、テンションは高く、今直ぐ帰りたい気分になった。

驚いているルリを見て、まだ状況を話していなかったと思い出す。

「皆、僕の大切な友人だよ。今日は久々に全員が集まったから急に飲み会になったんだ」

昭仁の話は嘘ではないが、少し言葉が足りない。

集まったのは確かに大切な人達だが、友人と言うより、仲間だ。
彼等は昭仁の仕事のサポートをするバンドのメンバーで、今日は、久々に全員が集まり、予定より早く終わったレコーディングの打ち上げをすることになったのだ。
戸惑っているルリの背中を優しく押して、座るように勧める。
右隣に座った昭仁の視線が自分の背後に向けられたことに気付き、左隣を見る。
左隣に座る男は、体をルリの方へ向けて、テーブルに肘を付いて笑みを浮かべている。
笑顔の理由が判らず、気味が悪いと思いながら、作り笑いで会釈をする。
無意識に、昭仁の方へ体を寄せていた。
そんなルリを見て、昭仁を信頼しているのだと、その男―晴彦は思った。
今、初めて会う自分より、先に知り合った昭仁の方を信頼するのは当然だと思いながら、少し悔しく思った。
「さっきは急に電話してゴメンね」
ルリとの距離を縮めたくて、言葉を砕いた。
晴彦の声を聞いて、彼がさっきの電話の相手なのだと気付いた。

彼は自分に会ってみたいと言っていた。だから自分を品定めするような目でジロジロと見ていたのだと納得した。

「呼んでいただいて嬉しいわ」

ルリのよそよそしい口調と、昭仁に身を寄せる姿を見て、羨ましいと思った。

年上が好みの晴彦にとって、ルリはタイプの女性だった。

昭仁より先に出逢っていれば、確実に恋に落ちていただろう。

そして確実に、昭仁が今まで付き合ってきた女性とは、真逆のタイプだと思った。

ルリの何処が昭仁の心を射止めたのか、興味が湧いた。

晴彦が何か言おうと息を吸い込んだ時、晴彦の背後から二人の男性が顔を出した。

かなり酔っている様で、顔は真っ赤になっている。

「質問」

背の低い方が右手を上げる。

「何処で知り合ったんですか？」

「プライベートの昭仁さんって、どんな風ですか？」

「何時から付き合ってるんですか？」

最後の質問を聞いて、疑問が生まれる。

「付き合ってる？」

訝しげな顔で昭仁を見る。と、昭仁は赤面して、慌てて否定する。

「彼女は━」

「何言ってんだよ。ほら、あっちのグラス、空だぜ」

気を効かせた晴彦が、目の前にあったビール瓶を渡すと、二人は他のメンバーの所へ行く。

「ゴメンね。あいつら酔ってて」

晴彦は、昭仁がパニックになって上手く切り抜けられないと思って、昭仁の代わりに謝ったのだが、晴彦に向けた笑みは、明らかに作り笑いだった。

その後も、何か話し掛けられても作り笑いを返すだけで、終始つまらなそうな顔をしていた。

昭仁と晴彦の二人は、そんなルリに気付いていながら、何も出来ない自分達に苛立ちを感じていた。

酔いが皆を完全に支配した頃、上着とバッグを持ったルリが不意に立ち上がった。

「どうしたの？」

「これからは若い人の時間でしょ？　オバサンは退散するわ」

「オバサンだなんて」

「良いのよ。若い子のノリについていけない私はオバサンだわ」

ルリの言葉に返す言葉が見付からなかった。

作り笑いを向けてから背を向けたルリを、昭仁が呼び止める。

「送って行くよ」

立ち上がろうとする昭仁を、ルリが止める。

昭仁に対して、苛立ちを感じていた。

これ以上、一緒に居られない。

「良いの。お友達を大切にして」

昭仁はルリの苛立ちに気付いたのか、ルリが止めるのも構わずに立ち上がる。

「彼等なら判ってくれるから。それに、酔ってるしね」

昭仁は笑顔で言うが、ルリの顔に笑みは無い。

部屋を出る時も、店を出た時も、ルリはずっと俯いて昭仁を見ようとしない。

鈍感な人間でも、相手が不機嫌だと気付く。

どちらかと言えば鈍感な昭仁だが、ルリが不機嫌だと気付いていた。

ルリが怒るようなことをしただろうかと考える。

思い当たる事は、一つある。

ためらいがちに、ルリを呼ぶ。

前を歩くルリは、無言で立ち止まる。が、振り返りはしない。

顔も見たくない―とでも言いたいのだろうか？　と不安になるが、勇気を振り絞る。

「もしかして、怒ってる？」

「怒ってるわ」

昭仁の予想通りだった。

「俺、何か失礼な事したかな？」

昭仁の言葉を聞いて、弾かれた様に振り返ったルリの顔には、怒りの表情があった。

「私を馬鹿にしてるの？」

「ちょっと待って」

慌てて、何の事か判らないと説明しようとしたが、ルリの勢いに負けて、出来なかった。

「私は、何時からあなたの彼女になったの？」

ルリが何故怒っているのか、やっと分かった。

メンバーがルリの事を昭仁の彼女だと勘違いをしたせいで、ルリは、昭仁が彼等に自分の事を彼女だと紹介したのだと思い込んだ。

「私、あなたと付き合うなんて言ったかしら？」

「そんな―」

彼等が勝手に誤解した―とは言えなかった。

「彼氏の居ない女だからってバカにしないで。私の理想は、としうえの男よ。年下の男を好きになる筈がないでしょ」

昭仁がきずつくと判っていたが、溢れ出る言葉と沸き上がる怒りは止められなかった。

婚約者に裏切られた哀しみと、年下にバカにされた怒りがルリを支配していた。

怒りに任せて、言いたくもない言葉を吐き出す様に言うと、昭仁に弁解する暇すら与えず、背を向けて歩き去った。

×××

ルリが帰ってからきっかり３０分後、晴彦が隣に座る昭仁を呼んだ。

メンバー達は既に酔っ払い、居眠りをしている者も居る。

酔わずにテーブルに向かっているのは、昭仁と晴彦の二人だけだ。

昭仁は、ルリの事が気になって考え込み、元々あまり好きではない？お酒に手が伸びず、晴彦は、周りを盛り上げるだけ盛り上げておいて、自分は傍観するのが好きで、あまり飲んでいない。

飲み会では、何時も二人が仲間の介抱をする役目だが、今日の二人は、特別酔えない状況だった。

「彼女、怒らせちゃったな」

晴彦の囁きに「うん」と暗く頷く。

好きな人を怒らせて、嫌われたかもしれないと思えば、暗くなって当然だ。が、晴彦は、暗い顔ではなかった。

笑みを含んだ目で、昭仁を見ている。

「諦めないんだろ？」

「勿論」

即答だった。

一度や二度の失敗で諦める昭仁ではないと、判っていた。

「でも、綺麗な人だよな」

晴彦の言葉を聞いて、急に不安になる。

晴彦の好みが年上の女性だと、今思い出した。

彼を信頼しているから、彼がルリを奪い取るような真似はしないと判っている。

それでも、ルリを奪われるのではないかと不安になった。

今まで、こんな不安を感じたことはない。

それだけ、ルリの事を本気で愛してしまったのだ。

「汚名挽回しなきゃな」

晴彦の言葉を聞いて、頭を振って悪い考えを追い出した。

「ライブに招待したら？　旅行も兼ねて、北海道とか沖縄とか。初めは北海道だよな。温泉とか、旅行っぽくて良いなぁ」

自分の世界に入ってしまった晴彦を見て、もう彼の妄想を止められないと思った。

「よし！　俺に任せろ。悪いようにはしないよ」

晴彦に対して、絶対に「嫌だ」と言えない昭仁が、そこに居た。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2660m/

ラビューラビュー―Love You Love You―

2010年12月30日01時46分発行